「源氏物語と囲碁」空蝉より

『源氏物語』で囲碁が登場する場面は「手習」、「空蝉（うつせみ）」、「竹河」、「宿木」の巻等で、「空蝉」では空蝉と軒端荻（のきばのおぎ）が女性同士で碁を打っている場面が描かれています。紫式部に囲碁の素養があったと思われます。

「空蝉　空蝉と軒端荻、碁を打つ」より

本文	渋谷栄一訳	与謝野晶子訳
碁打(ごうち)果(は)てて、結(けち)さすわたり、心(こころ)とげに見(み)えて、きはぎはとさうどけば、奥(おく)の人(ひと)はいと静(しづ)かにのどめて、	碁を打ち終えて、だめを押すあたりは、機敏に見えて、陽気に騒ぎ立てると、奥の人は、とても静かに落ち着いて、	碁が終わって駄目石を入れる時など、いかにも利巧に見えて、そして蓮葉に騒ぐのである。奥のほうの人は静かにそれをおさえるようにして、
「待(ま)ちたまへや。そこは持(ぢ)にこそあらめ。このわたりの劫(こふ)をこそ」など言(い)へど、	「お待ちなさいよ。そこは、持でありましょう。このあたりの、劫をうつべきでしょう」などと言っても	「まあお待ちなさい。そこは両方ともいっしょの数でしょう。それからここにもあなたのほうの目がありますよ」などと言うが、
「いで、このたびは負(ま)けにけり。隅(すみ)のところ、いでいで」と指(および)をかがめて、「十(とを)、二十(はた)、三十(みそ)、四十(よそ)」などかぞ	「いやはや、今度は負けてしまいましたわ。隅の所は、どれどれ」と指を折って、「十、二十、三十、四十」などと数える様子は、伊予の湯桁もすらすらと数えられそうに見える。少し下品な感じがする。	「いいえ、今度は負けましたよ。そうそう、この隅の所を勘定しなくては」指を折って、十、二十、三十、四十と数えるのを見ていると、無数だという伊予の温泉の湯桁の数もこの人にはすぐわかるだろうと思われる。少し下品である。

ふるさま、伊予の湯桁もたど、 たどしかるまじう見ゆ。 すこし品おくれたり。		

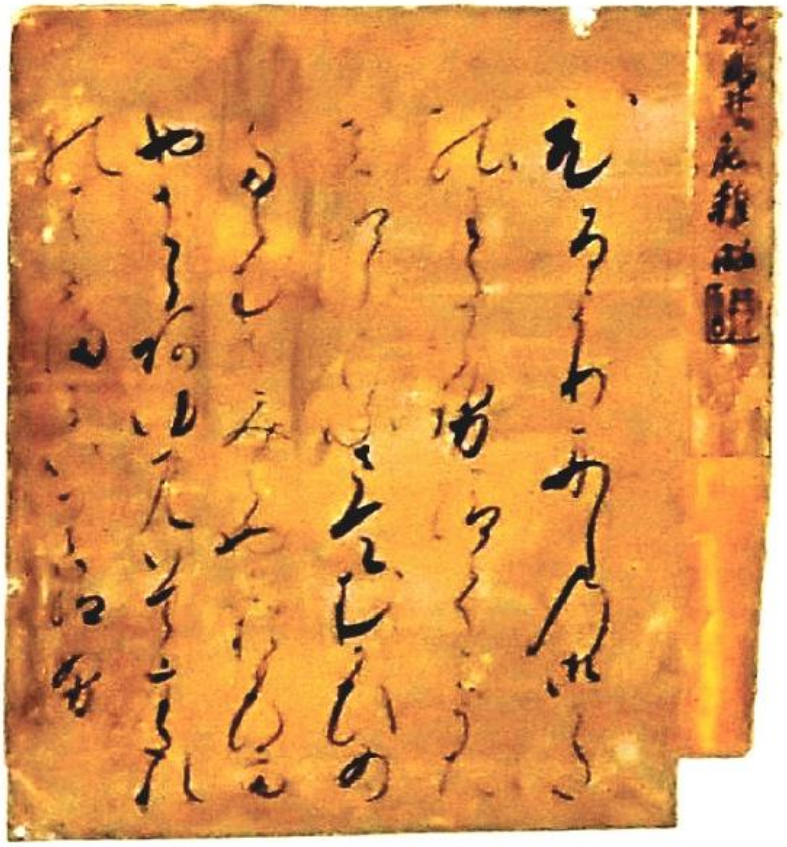
持：セキ　セキを漢字で書くと持

赤字部分の結、持、劫、隅は囲碁用語です。

「源氏物語の世界　再編集版」より

源氏物語図扇面および詞書（第三帖　空蝉）（個人蔵）

空蝉扇面



第三帖　空蟬

空蟬詞書

飛鳥井　雅昭

第三帖　空蟬　（大島本）より

光る源氏十七歳夏の物語

第三段　空蟬と軒端荻、碁を打つ

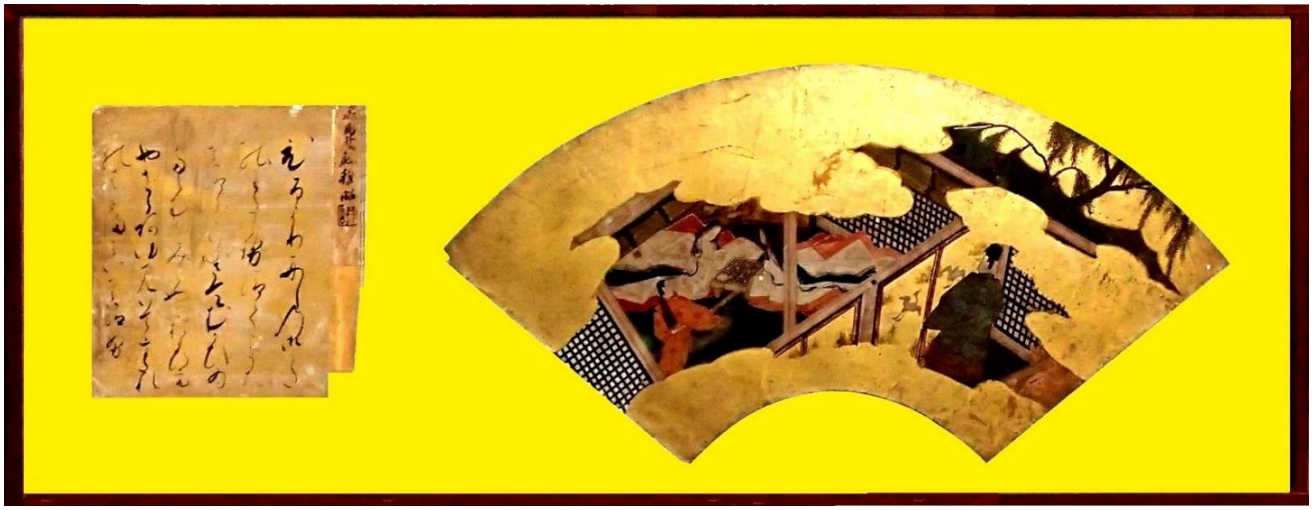
本文	渋谷栄一訳	与謝野晶子訳
「昼より、西の御方の渡らせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。	「昼から、西の御方がお渡りあそばして、碁をお打ちあそばしていらっしゃいます」と言う。	「お昼から西の対－寝殿の左右にある対の屋の一つ－のお嬢様が来ていらっしゃって碁を打っていらっしゃるのです」 と女房は言った。

さて向かひゐたらむを見ばや、 と思ひて、やをら歩み出でて、 簾 のはさまに入りたまひぬ。	そうして向かい合っているのを見たい、と思って、静かに歩を進めて、簾の隙間にお入りになった。	源氏は恋人とその継娘が碁盤を中にして対い合っているのをのぞいて見ようと思って開いた口からはいって、妻戸と御簾の間へ立った。

源氏物語の詞書（ことばがき）とは、絵巻物において絵に対応する部分の本文を抜き書きしたものです。絵の内容を説明したり、登場人物の言葉を書き記したりする役割があります。源氏物語絵巻の詞書は、絵巻の成立年代や書風、本文系統を研究する上で重要な資料となっています。

飛鳥井　雅昭〈あすかい　まさあき・1611-79〉は、江戸時代初期の公卿。
雅庸〈まさつね・1569-1615〉の第三子で、初名は雅昭、寛永10年〈1633〉雅章と改名。兄雅宣〈まさのぶ・1586-1651〉の養子となり飛鳥井家を相続、従一位・権大納言に至る。
飛鳥井家は、代々、蹴鞠と和歌の二道をもって聞こえていた。ウィキペディアより

源氏物語図扇面・詞書（空蝉、夕顔、紅葉賀、花宴、賢木）



拡大

源氏物語図扇面・詞書（各帖あらすじ）

源氏物語図扇面・詞書（空蝉、夕顔、紅葉賀、花宴、賢木）原文対訳付き